次期学習指導要領 教科別まとめ　　小学校 No.10

審議まとめ（2026年10月5日）を**小学校の先生向け**にまとめ直しました

外国語活動・外国語

次期学習指導要領で、どう変わる？

小学校版





10秒でいうと　外国語活動と外国語科の形は維持。読む・書くの段階を細かく示し、語順の違いに気付かせる

やさしく言うと

3・4年の外国語活動と5・6年の外国語科という今の形は続く見込みです。そのうえで、つまずきの多い「読むこと」「書くこと」を、段階を追って丁寧に育てる方向です。学習は、考えを伝え合う「コミュニケーション活動」と、それを支える活動の2つで整理されます。中学校の文法につなげるため、日本語と英語の語順の違いに気付かせることも重視されます。

小学校はいつから？

全面実施	**2030年度（令和12年度）から**（見込み）
移行期間	2028～2029年度
告示	2026年度末の予定
教科書	2030年度から新しい教科書（2028年度に検定）

この冊子の中身

1 外国語活動・外国語のポイント　4つ
2 主な変更点　32項目
3 現行と次期の比較（新旧対照）　13項目
4 目標の新旧（現状→改善イメージ）
5 語彙（単語の数）はどうなる？
6 CEFRレベルの目安
7 評価はどう変わる？
8 国が用意するもの（支援）
9 生成AI・ICTとの付き合い方　13項目
10 今からできる準備チェックリスト　17項目
11 次期を先取りする授業アイデア　10本
12 指導案（試案）　2本
13 現行の学習指導要領・解説（小学校）

無料 原田英語.com 次期学習指導要領ナビ

研修・会議・授業・保護者会での印刷・コピー・配布・投影はご自由にどうぞ。ご連絡は不要です。クレジットは残してください。
審議まとめ（2026年10月5日）準拠・出典ページつき。告示前の方向性で、今後変わることがあります。2026年11月4日 版

サイトで見る

外国語の3行要約（全校種）

1. 「言語活動」を「コミュニケーション活動」と「それを支える活動」に分け直し、英語の目標は「知・技」「思・判・表」「学びに向かう力」の3つの柱で示す方向。
2. 国が基盤語彙リストを作り、中学校の文法は使用頻度の高いものに絞り、「社会的な話題」は「身近な社会的な話題」にするなど、難しくなりすぎた内容を適正化する方向。
3. 高校の科目は「英語コミュニケーション（総合）」「同（発信）」（いずれも仮称）とする案。B2レベル相当以上などの要件を満たす場合の必履修科目の免除・振替や、AIの適切な活用の明記も提案された。

※高校の新科目名「英語コミュニケーション（総合）」「英語コミュニケーション（発信）」は仮称。単位数（学習量）は現行と同じ。外部試験でCEFR B2レベル相当以上の英語力を確認することなどを要件に、英語コミュニケーション（総合）Ⅰの免除・振替を学校の判断で可能とする案。対象試験・振替先・実施条件は今後、解説等で具体化（P48～49、P284）。

1 外国語活動・外国語のポイント

4つ

1 「読む・書く」は音声に慣れてから段階的に

一文を書き写す問題の正答率に学校間で差があるなど、「書くこと」に課題があるとされました。「読むこと」も、先生が指導の難しさを感じている領域です。そこで、外国語活動の音声での慣れ親しみから、読む・書くを含む外国語科へ、なめらかにつなぐ指導を示す方向です。 P277 P281

授業では、たとえば たとえば、歌やチャンツで十分に聞いた語句を、絵と文字で見比べてから書き写す、という順番で進めることが考えられます。

2 日本語と英語の「語順の違い」に気付かせる

中学校の文法指導につなげるため、外国語科では、日本語と英語の語順の違い（文の組み立て）に気付かせることを示す方向です。音と文字の関係に慣れ、簡単な語句や基本的な表現を読んだり書いたりできるようにすることも挙げられています。 P281 資料編（3）P19（外⑲）

授業では、たとえば たとえば「I like soccer.」と「わたしはサッカーが好き」を並べます。言葉の順番の違いを子供が見つける短い時間が考えられます。

3 「コミュニケーション活動」と「支える活動」

学習は、考えを伝え合う「コミュニケーション活動」と、語句や表現に慣れるなど「それを支える活動」の2つに整理されます。2つを行き来しながら、知識と、それを使う力を一緒に育てる考え方です。「練習」という言葉は本文では使わない方向です。 P279 P284

授業では、たとえば たとえば、好きな物を尋ね合う活動の前に、必要な表現を聞いて慣れる短い活動を入れ、また伝え合いに戻る流れが考えられます。

4 外国語活動の教材と、学年ごとの目標の扱い

国の外国語活動の教材には、伝え合う目的や場面を作りにくい単元があると指摘されています。より身近で楽しく、5・6年につながる形に見直す方向です。また、学年ごとの目標を各学校が必ず作るきまりはなくし、必要なときに任意で作る位置付けとされています。P280

資料編(3)P17(外⑰) 資料編(3)P19(外⑲)

授業では、たとえば たとえば学年会で、各単元に「だれに・何のために伝えるか」があるかを確かめます。足りない単元に相手や場面を加えることが考えられます。

2 主な変更点

32項目

1. 小 外国語活動・外国語科の枠組みは続く

3・4年で音声中心に慣れ親しむ「外国語活動」、5・6年で読む・書くを加える「外国語科」という現行の形は成果が出ているとされ、目標の柱書でも「素地」(活動)と「基礎」(外国語科)の違いは残る。学習は「コミュニケーション活動」と「それを支える活動」を通して進める。

P276 資料編(3)P1(外①)

2. 小 外国語活動の活動は「聞く・話す」で

外国語活動のコミュニケーション活動と支える活動は聞くこと・話すことについて行う。支える活動は、英語の音声や基本的な表現に慣れ親しみ、言語や文化の違いや共通点を体験的に理解する活動。導入した表現をすぐ話せることを求めず、聞いて慣れ親しむ段階から話す段階へつなぐ。

資料編(3)P33(外㉝) 資料編(3)P36(外㊱)

3. 小 外国語科では「音声で十分に慣れ親しんでから」読む・書く

小学校外国語では、導入した語彙や表現をすぐ話せる・書けることを求めず、聞く・読むで理解する段階から話す・書く段階へ発展させる。特に読む・書くは音声で十分に慣れ親しんだ上で指導する。支える活動はコミュニケーション活動と関連付けることが特に大事とされる。資料編(3)P32(外㉜) 資料編(3)P35(外㉟)

4. 小 「読むこと」「書くこと」の段階を細かく示す

「書くこと」「読むこと」に課題があるため、文字を聞いて識別する→文字の形を認識し名称を発音する→音声と文字の関係に慣れ親しむ→語句を読んで意味を捉える、書き写す→語句を選んで書き写す→例を参考に書く、のように段階を示す。P277 資料編(3)P21(外㉑) 資料編(3)P43(外㊸)

5. 小 文字の扱いを丁寧に（外国語活動でも）

国語科のローマ字学習や、新しい「情報の領域(仮称)」のタイピングなどと関連を図りながら、外国語活動でも文字に慣れ親しむ活動を大切にする。外国語活動の「内容」に「文字」(読み方を聞いてどの文字か分かる等)を丁寧に示すイメージ。資料編(3)P17(外⑰) 資料編(3)P42(外㊷)

6. 小 Let's Try!を見直す

伝え合う目的や必然性のある場面を設定しにくい単元があるという指摘を受け、より身近で楽しく活動できる内容にし、5・6年につながるよう目的・場面・状況を意識した活動を段階的に扱う形に見直す。資料編(3)P17(外⑰)

7. 小 語順の違いへの気付きで中学校へつなぐ

中学校の文法指導につなげるため、外国語科では日本語と英語の語順の違い(文構造)に気付かせる。音声と文字の関係に慣れ親しみ、簡単な語句や表現を読んだり書いたりできるようにする。文を書き写すときは語と語の区切りに注意させる。P281 資料編(3)P19(外⑲) 資料編(3)P43(外㊸)

8. 小 話題を学年相当で段階的に

外国語活動(3・4学年相当)は「相手のことや身の回りの物」「ごく身近な事柄」、外国語(5・6学年相当)は「自分のことや相手のこと」「身近な事柄」など、話題を段階的に示す。読む・書くの話題も段階的に示す。資料編(3)P20(外⑳) 資料編(3)P42(外㊷) 資料編(3)P43(外㊸)

9. 小 学年ごとの目標の作成義務をなくす方向

現行は「学年ごとの目標を適切に定め」2学年間を通じて目標の実現を図ることになっているが、審議まとめでは一律の作成義務をなくし、必要なら任意で作る方向が示された。P280 資料編(3)P19(外⑲) 現行現行抜粋P6・P15

10. 小 目標の言葉が変わる
外国語活動の思・判・表は「身近で簡単な事柄」から「ごく身近な事柄」へ。外国語の学びに向かう力は「自らの学習を調整して、他者との相互理解を図ろうとする態度」に。外国語の目標から「推測しながら」「語順を意識しながら」は外し、内容の取扱いで示す。
資料編(3)P3(外③) 資料編(3)P6(外⑥)

11. 小 文化理解に「多様性の包摂」「多文化共生」
外国語の教材の留意事項に、多様性の包摂や他者との相互理解、多文化共生への理解をうながす観点を加えるイメージ。外国語活動の「内容」には文化に関する事項（日本と外国の生活・習慣・行事の違いなど）を置く。
資料編(3)P26(外㉖)

12. 小 小学校向け研修は担任と専科の両方に配慮
国が作る研修用の動画や資料は、学級担任と専科教員それぞれのニーズに合うよう十分に配慮するとされた。P285

13. 小 全面実施は令和12年度から（想定）
小学校の全面実施は令和12年度～が想定されている。評価の「見取る姿」などは小中について令和10年度末までに周知するとされている。P38 P65

14. 英語の目標を「3つの柱」で示す
現行の英語の目標（高校は科目目標）は「聞くこと」など5つの領域別に書かれていた。次期は外国語の目標と同じように「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱で示す。領域ごとの細かい「できること」は「内容」の方へ移す。P279 P280 資料編(3)P16(外⑯)

15. 「内容」を学年段階の目安つきの表で示す
領域別の目標の要素を「内容」に移し、話題や活動がだんだん高度になる様子を、「○学年相当」という目安とともに表形式で示す。学年ではっきり区切るのではなく、柔軟性を残した目安とする。表は「知・技」と「思・判・表」を並べる「並行」パターン。P280 資料編(3)P16(外⑯) 資料編(3)P18(外⑱)

16. 小 中 学年ごとの目標の一律の作成義務をなくす方向
学習指導要領自体が段階的な内容を示すようにするため、これまで各学校に求められていた「学年ごとの目標」の一律の作成義務はなくすべきとされた。必要な場合に学校が任意で作る位置付けになる見込み。P280 資料編(3)P19(外⑲)

17. 「言語活動」から「コミュニケーション活動」へ
学習の中心を「コミュニケーション活動」（主に思・判・表を育てる）と「コミュニケーション活動を支える活動」（主に知・技を育てる）に分けて整理し、目標の柱書に書く。単元はコミュニケーション活動を中心にしながら、2つの活動を行き来して力を一体的に育てる。P279 P284 資料編(3)P31(外㉛)

18. 「言語の使用場面」「言語の働き」の名前と置き場所が変わる
現行で「内容」にある言語活動・言語の使用場面・言語の働きの例は、「指導計画の作成と内容の取扱い」に移し、「コミュニケーション活動」「コミュニケーションの場面」「コミュニケーションの意図（仮称）」と呼ぶ。「内容」は資質・能力だけに絞る。P280 資料編(3)P16(外⑯) 資料編(3)P37(外㊲)

19. 「統合的な理解」と「総合的な発揮」
知・技のゴールの姿を「統合的な理解」（英語のきまりを組み合わせて使うと理解や表現の質が高まると分かっている姿）として示す。思・判・表は「総合的な発揮」として、CEFRの分類を参考に「理解する」「表現する」「伝え合う」の3つに分けて書く。5領域をバランスよく育てる授業づくりをうながすねらい。P280 資料編(3)P8(外⑧) 資料編(3)P9(外⑨)

20. 外国語の「見方・考え方」を新しく
「外国語及び外国語によるコミュニケーションを、文化の違いや社会及び相手との関わりに着目して捉え、多様な他者の考えを受け止めるとともに、表現等を工夫して自分の考えを伝え、相互理解を図ること」と整理し直す（現行101字→91字）。AI時代に学ぶ意義と、人間ならではの非言語コミュニケーションも意識した表現。
P279 資料編(3)P7(外⑦)

21. 「学びに向かう力」を4つの要素に
①コミュニケーションへの興味・関心と伝えたい考えの形成、②対話・協働で考えを広げ深める態度、③自己イメージを持ち振り返りながら学習を調整する態度、④主体的に他者との相互理解を深めようとする心情、の4つに整理する。目標の文もこれに合わせて書き換える。P279
資料編(3)P4(外④) 資料編(3)P5(外⑤) 資料編(3)P6(外⑥)

22. 「練習」という言葉を使わない
「練習」という言葉から思い浮かべるイメージが人によって違うことや、本文でこの語を使う教科がごく一部であることから、学習指導要領本文では「練習」を使わずに必要な活動を書く。P284 資料編(3)P27(外㉗)

23. 国が「基盤語彙リスト」を作る
複数のコーパスなどを参考に、国が語彙選定のための基盤語彙リストを作り、教科書会社にリストの語を使うよう推奨する。語の難しさや使用頻度などから、指導すべき語彙数も精選を含めて見直す。高校の教科書の多様性は守り、リストは研究を続けて更新する。 P283 P61 資料編(3)P29(外㉙)

24. 自分のこと・地域・日本・自分の意見を伝える
話題や活動の例を見直し、自分のことや日本のことに加えて、自分の意見を言える活動を充実させ、住んでいる地域の話題も明確に位置付ける。AIや学校内外の交流も使い、自分が伝えたいことを伝える活動を強める。 P281 P10 資料編(3)P25(外㉕)

25. CEFRに照らしてレベルを点検
現行では、各校種で想定したCEFRレベル(小～A1程度、中A1～A2程度、高A2～B1程度)より高い内容が書かれている場合がある。今後は「内容」や活動例をCEFRに照らして適切な文言にし、教師の足場かけが前提のものは解説で趣旨を示す。 P283

26. 小 中 小中のつなぎ目を具体的に示す
各学校段階で身に付けさせること、前の校種からつなぐために重点を置くことを「指導計画の作成と内容の取扱い」で具体的に示す。例:小学校では日本語と英語の語順の違いに気付かせる、中1の初めは音声中心にし小学校の話題や表現を繰り返す、3年間を通じて発音と綴りを結び付ける。 P281 資料編(3)P18(外⑱) 資料編(3)P19(外⑲)

27. AIの適切な活用を学習指導要領に明記する方向
オンラインでの人との交流も含むデジタル学習基盤の活用を明記し、その一つとして発達の段階に応じたAIの適切な活用も書くべきとされた。目標はあくまで人間同士のコミュニケーションで、AIを使った会話練習などはそのための手段という原則をはっきりさせる。 P278 P282 P88

28. 科学的知見にもとづく学び方の指導
第二言語習得や認知心理学、学習科学の知見を踏まえ、児童生徒が家庭学習も含めて自分で学習方略を使えるようにする。国が教師の指導や学習者に役立つ動画や資料を、学校の負担にも配慮して作る。 P278 P281 資料編(3)P15(外⑮)

29. 文化理解と「多様な外国語」
多様性の包摂や多文化共生のための文化理解、母語や自国の文化を見つめ直すための言語の違いの理解を充実させる。帰国生徒や外国につながる生徒の外国語の力を生かす配慮を外国語の解説にも書く。英語以外の外国語については、開設状況の公表やオンライン講座などを検討する。 P282 資料編(3)P26(外㉖) 資料編(3)P27(外㉗) 資料編(3)P28(外㉘)

30. 評価規準の作り方が楽になる
「内容のまとまりごとの評価規準例」は国が示し、学校での作成は不要とする方向。外国語の「内容のまとまり」は5つの領域とする方向。学校が作る単元の目標はそのまま評価規準となるようにし、「内容」を基に作る。 P285 資料編(3)P38(外㊳) 資料編(3)P39(外㊴)

31. 小 小学校の教材「Let's Try!」を見直す
外国語活動の国の教材Let's Try!を、より身近で楽しく活動できる内容にし、5・6年の外国語科につながるよう目的・場面・状況を意識した活動を段階的に扱う形に見直す。外国語活動でも文字に慣れ親しむ活動を大切にする。 資料編(3)P17(外⑰)

32. 教師を支える国の研修と資料
文部科学省が全国の教師向けに大規模なオンライン研修を行う。国が作る動画や資料は自治体の研修でそのまま使えるように作り、小学校向けは学級担任と専科教員それぞれのニーズに配慮する。ALTとの連携についての動画・資料も出す。 P285

3 現行と次期の比較（新旧対照）

13項目

黄色のマーカー＝次期で新しく入る・強く打ち出される言葉　~~取り消し線~~＝現行から消える・言い方が変わる言葉

項目	現行	次期（審議まとめの方向）
学年ごとの目標	各学校が「~~学年ごとの目標を適切に定め~~」ることになっている(小:2学年間、中:3学年間を通じて目標の実現を図る)。	学習指導要領が段階的な内容を示すので、学年ごとの目標の**一律の作成義務はなくし**、必要な場合に**任意で作る**方向(審議まとめの案)。 P280 資料編(3)P19(外⑲) 現行現行抜粋P6・P15・P25

項目	現行	次期（審議まとめの方向）
見方・考え方	外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、~~社会や世界、他者との関わり~~に着目して捉え、目的や場面、状況等に応じて、~~情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること~~(101字)。	外国語及び外国語によるコミュニケーションを、**文化の違いや社会及び相手との関わり**に着目して捉え、**多様な他者の考えを受け止める**とともに、**表現等を工夫して**自らの考えを伝え、**相互理解を図ること**(91字)。 P279　資料編(3)P7(外⑦)
知識及び技能の目標の書き方	外国語の~~音声や語彙、表現、文法、言語の働きなど~~を理解し、聞く・読む・話す・書くことによる実際のコミュニケーションで活用できる技能(中)。	「**外国語の特徴やきまり**」を理解し、実際のコミュニケーションで活用できる技能。各言語材料や領域の列挙は目標から省いて短くする。　資料編(3)P2(外②)
目標で扱う話題	中・高の目標に「~~日常的な話題や社会的な話題~~について」と書く。小学校外国語活動は「~~身近で簡単な事柄~~」。	目標では中学校「**様々な話題**」、高校「**幅広い話題**」とし、具体的な話題は「内容」で示す。小学校外国語活動は「**ごく身近な事柄**」、外国語は「身近な事柄」。　資料編(3)P3(外③)
活動の名前	~~言語活動~~	**コミュニケーション活動**(主に思・判・表を育てる)と**コミュニケーション活動を支える活動**(主に知・技を育てる) P277　P279　P284　資料編(3)P31(外㉛)
言語の使用場面	「内容」の中に「~~言語の使用場面の例~~」として示す。	「**指導計画の作成と内容の取扱い**」に移し、「**コミュニケーションの場面**」として例示する。　P280 資料編(3)P16(外⑯)　資料編(3)P37(外㊲)
言語の働き	「内容」の中に「~~言語の働きの例~~」として示す。	「**コミュニケーションの意図(仮称)**」として例示する(例：相手との関係を円滑にする・気持ちを伝える／事実・情報を共有する・相手の行動を促す／考えや意図を共有する)。知・技の指導での扱い方も示す。　P280　資料編(3)P37(外㊲)
「内容」に入るもの	知・技(言語材料)、思・判・表、~~言語活動及び言語の働きに関する事項~~(言語活動・使用場面・働きの例)。	「内容」は**資質・能力に限る**。思・判・表は「**総合的な発揮**」と領域ごとの「話題・条件・できること」、知・技は「**統合的な理解**」と英語の特徴やきまりに関する事項。活動の例は「指導計画の作成と内容の取扱い」へ。　資料編(3)P16(外⑯) 資料編(3)P44(外㊹)
思考力、判断力、表現力等の示し方	~~5つの領域別の目標~~と、それを大まかにまとめた「内容」の思・判・表。重なりがあり、深まりが見えにくい。	「総合的な発揮」をCEFRの分類(Reception・Production・Interaction)を参考に**【理解する】【表現する】【伝え合う】**に分け、領域ごとの内容は学年段階の目安つきで示す。　P280　資料編(3)P8(外⑧)
AIの扱い	学習指導要領にAI活用の位置付けがない。	デジタル学習基盤の活用を明記し、その一つとして発達の段階に応じた**AIの適切な活用**を書く。**人間同士のコミュニケーション**を充実させるという原則を明確に。 P277　P278　P282
評価規準の作り方	各学校が①内容のまとまりごとの評価規準、②単元の目標、③単元の評価規準を作る。外国語は領域別目標が3つの柱で整理されておらず、作業が煩雑。	内容のまとまりごとの評価規準例は**国が示し**、学校の**作成は不要**。外国語の「内容のまとまり」は**5つの領域**とする方向。単元の目標が**そのまま評価規準**になるようにし、「内容」を基に作る。　P285　資料編(3)P38(外㊳)　資料編(3)P39(外㊴)
小学校外国語の思・判・表の目標	音声で十分に慣れ親しんだ語彙や基本的な表現を「~~推測しながら~~読んだり、~~語順を意識しながら~~書いたり」して伝え合う基礎的な力。	「推測しながら」「語順を意識しながら」は「**内容の取扱い**」で示し、目標は「読んだり書いたりして、伝え合うことができる基礎的な力」と短くする。　資料編(3)P3(外③)
教材に関する留意事項（文化）	多様な考え方への理解、我が国の文化や英語の背景にある文化、国際理解の観点。	これらに「**多様性の包摂**」「**多文化共生**に対する理解」を加え、話題・活動にも明示する。　P282　資料編(3)P25(外㉕) 資料編(3)P26(外㉖)　資料編(3)P27(外㉗)

4 目標の新旧（現状→改善イメージ）

資料編の外①（柱書）、外②（知識及び技能）、外③（思考力、判断力、表現力等）、外⑥（学びに向かう力、人間性等）の「現状」と「改善イメージ」の対照表を要約した。いずれも外国語の目標で、「告示や解説を示すにあたり引き続き検討」と注記されている。英語の目標・高校の科目目標のイメージは外㊶〜㊽にある。

校種・観点	現行	次期（改善イメージ）
小学校外国語活動 **柱書**	見方・考え方を働かせ、聞くこと、話すことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を育成。	コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を、コミュニケーション活動及びそれを支える活動などを通して育成。資料編（3）P1（外①）
小学校外国語 **柱書**	聞く・読む・話す・書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成。	コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を、コミュニケーション活動及びそれを支える活動などを通して育成。資料編（3）P1（外①）
小学校外国語活動 **知識及び技能**	言語や文化を体験的に理解し、日本語と外国語の音声の違い等に気付き、音声や基本的な表現に慣れ親しむ。	言語や文化を体験的に理解し、音声や基本的な表現に慣れ親しむ（音声の違いへの気付きは「内容」で）。資料編（3）P2（外②）
小学校外国語 **知識及び技能**	音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて日本語との違いに気付き理解し、読む・書くことに慣れ親しみ、基礎的な技能を身に付ける。	外国語の特徴やきまりを理解し、読むこと・書くことに慣れ親しみ、実際のコミュニケーションで活用できる基礎的な技能を身に付ける。資料編（3）P2（外②）
小学校外国語活動 **思考力、判断力、表現力等**	身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりして考えや気持ちを伝え合う力の素地。	ごく身近な事柄について、聞いたり話したりして考えや気持ちを伝え合う力の素地。資料編（3）P3（外③）
小学校外国語 **思考力、判断力、表現力等**	目的・場面・状況に応じ、身近で簡単な事柄について聞いたり話したり、推測しながら読んだり語順を意識しながら書いたりして伝え合う基礎的な力。	目的・場面・状況に応じ、身近な事柄について聞いたり話したり、音声で十分に慣れ親しんだ語彙や表現を読んだり書いたりして伝え合う基礎的な力。資料編（3）P3（外③）
小学校外国語活動 **学びに向かう力、人間性等**	言語やその背景にある文化への理解を深め、相手に配慮しながら主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度。	コミュニケーションなどに興味・関心を持ち、粘り強く自分の考えや気持ちを伝え、相手を理解しようとする態度。資料編（3）P6（外⑥）
小学校外国語 **学びに向かう力、人間性等**	外国語の背景にある文化への理解を深め、他者に配慮しながら主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度。	興味・関心を持ち、対話・協働で考えを広げ深め、自らの学習を調整して、他者との相互理解を図ろうとする態度。資料編（3）P6（外⑥）

5 語彙（単語の数）はどうなる？

現行の語数の目安

- 小：600～700語程度（3・4年の外国語活動で扱った語を含む）
- 小中高合計：4,000～5,000語（リストなし）

次期：国が「基盤語彙リスト」を作る方向

国が複数のコーパスを参照するなどして「基盤語彙リスト」を作り、教科書会社にリストの語を教科書で使うよう推奨する。語の難しさ（CEFRレベル等）や使用頻度にもとづく重要度（カタカナ語との対応なども含む）を考えて優先順位を付け、小・中・高への振り分けを検討する。その際、他のアジア諸国の状況も参考にする。指導すべき語彙数は、精選も含めて見直す（改善イメージでは合計「●語程度」とされ、数はまだ決まっていない）。ねらいは、教科書の語彙の難しさと選び方をならし、負担を適正にして、使用頻度の高い重要な語彙を様々な場面で繰り返し扱って身に付けさせること。高校は生徒の実態がさまざまなので教科書の多様性を守り、小中も難しくなりすぎないようにしながら多様な話題を扱えるよう配慮する。リストは必要に応じて更新できるよう継続的に調査研究する。入試や調査の作問に役立つよう、各教科書の新出語彙リストは電子データで提供されるべきとされた。

6 CEFRレベルの目安

小：～A1程度（改訂前の議論で想定されていた各校種のCEFRレベル） P283

7 評価はどう変わる？

1. 評価規準例は国が示し、学校での作成は不要にする方向

現行は各学校が①内容のまとまりごとの評価規準、②単元の目標、③単元の評価規準を作っている。審議まとめでは「内容のまとまりごとの評価規準例」を国が示し、学校の作成は不要にする方向が示された。 P285

2. 外国語の「内容のまとまり」は5つの領域

外国語の特質から引き続き5つの領域（聞く・読む・話す[やり取り]・話す[発表]・書く）で評価することが重要とされ、国の評価規準例の「内容のまとまり」は「内容」に示す5つの領域とする方向で検討する。 P285 資料編(3)P39(外㊴)

3. 単元の目標＝評価規準

学校が作る単元の目標はそのまま評価規準となるようにする。作るときは外国語の目標・英語の目標（高校は科目目標）を踏まえつつ「内容」を基にする。 P285 資料編(3)P38(外㊳)

4. 評価が煩雑だった理由が解消される

現行は領域別の目標が3つの柱で整理されておらず、「内容」も領域別でないため評価の手順が煩雑だったが、今回の構造化で改善されると考えられている。多くの教科と同じように「内容」から評価規準を作れるようになる。 P280 P285

5. 「統合的な理解」「総合的な発揮」は当面直接評価しない

当面は「統合的な理解」「総合的な発揮」の育成状況そのものを一律に直接評価することは求めず、単元構想を含む指導・評価の計画の質を支える役割とする。 資料編(3)P40(外㊵)

6. 知・技と思・判・表を同じテストで評価できる

知・技と思・判・表を同じパフォーマンステストなどで評価することも引き続き可能（具体は評価参考資料の作成時に検討）。単元例でも同一のパフォーマンステストで評価する例が示されている。 資料編(3)P13(外⑬) 資料編(3)P40(外㊵)

7. 総括は頻度を抑え、形成的評価を充実
学習成果の観点別評価・評定への総括は、学年末に絞るなど頻度を抑え、学習途中で差分を見取ってフィードバックする形成的評価を充実する（全教科共通の再整理案）。
資料編(3)P38(外㊳)

8. 学びに向かう力は「見取る姿」で長い期間に
学びに向かう力の「見取る姿」は単元ごとではなく、学年・学期などの長い期間を通じて見取る。「見取る姿」や運用方法は小中について令和10年度末までに周知するとされている。資料編(3)P13(外⑬) P65

9. MEXCBTとAIパフォーマンステスト
各学校の定期テストやパフォーマンステストに使えるよう、MEXCBTにCEFRを参照した問題を充実させ、AIを使ったパフォーマンステストツールの可能性を検討する。P285

10. 全国学力・学習状況調査の作問
今後の全国学力・学習状況調査は、CEFRレベルを勘案しつつ、個別の資質・能力に基づいて作問する。P283

11. デジタル学習指導要領で評価規準例を一括確認
資料編の単元づくりのイメージでは、デジタル学習指導要領で解説の記述や評価規準例、小学校を含む前後の学習内容も確認できる姿が描かれている。資料編(3)P12(外⑫)

8 国が用意するもの（支援）

1. 学習方略の動画・資料
第二言語習得・認知心理学・学習科学の知見を踏まえ、教師の指導や学習者の参考になる動画・資料を国が提供する。学校の負担軽減に留意し、教師の指導や自治体の研修でも使えるように作る。P281

2. AI活用の留意点・動画・資料
適切でない使い方も含めた留意点、動画・資料を国が具体的に示し、技術の発展に応じて更新する。外国語でのAI活用の考え方や実践事例も示す。P282 P88

3. クラスルームイングリッシュ等の表現集・動画
生徒の理解に応じた英語で指導する際に使える表現集（クラスルームイングリッシュ等）や動画を提供する。P284

4. 全国の教師向け大規模オンライン研修
改訂で重視する点を伝え、英語力・指導力の向上と継続的な授業改善を図るため、文部科学省が大規模なオンライン研修を行う。P285

5. 研修にそのまま使える動画・資料
国が作る動画・資料は自治体の教員研修でそのまま使えるようにし、教職課程でも使われることを念頭に作る。小学校向けは学級担任と専科教員それぞれのニーズに配慮する。P285

6. ALT等との連携の動画・資料
ALT等との効果的な連携のあり方について参考となる動画や資料を提供する。P285

7. 英語資格・検定試験の特別受験制度の周知
検定団体が教師や教職課程の学生向けに受験料を減額するなどの特別受験制度について、学生の活用が進むよう一層周知する。P285

8. 教員養成のコアカリキュラム改善
教員免許制度の見直しを踏まえた外国語（英語）コアカリキュラムの改善で、科学的知見や学習方略の指導方法を学べるようにする。P285

9. MEXCBTの問題充実
定期テストやパフォーマンステストに使えるよう、MEXCBTにCEFRを参照した問題を充実させる。P285

10. 国の評価規準例
「内容のまとまりごとの評価規準例」を国が評価の参考資料で示す。P285

11. 基盤語彙リストと新出語彙リストの電子データ
国が基盤語彙リストを作る。各教科書の新出語彙リストは入試や調査の作問に役立つよう電子データで提供されるべきとされた。P283 資料編(3)P29(外㉙)

12. Let's Try!の見直し
国が作成・配布している外国語活動教材Let's Try!を、身近で楽しい内容、5・6年につながる段階的な活動に見直す。資料編(3)P17(外⑰)

13. 教育課程特例校の実践事例の提供
教育課程特例校1,915校（令和7年4月時点）のうち1,483校が外国語に関する内容。制度が調整授業時数制度に統合されることを踏まえ、参照できる実践事例を教育委員会等に積極的に提供する。
P284 P36

14. 多様な外国語の学びの支援
各校の開設状況の公表と共有、教師の指導力向上・学習者同士の交流・オンライン講座の開設などの可能性の検討、大学が公表している教材などの資料の収集・公表を行う。P282

15. 外国語を使う機会の充実
英語キャンプ、英語での探究、海外校との交流、海外留学、ALT等の配置拡充など、先行事例の成果を共有し各地方の取組を推進する。P285 資料編(3)P15(外⑮)

16. デジタル学習指導要領
資料編のイメージでは、デジタル学習指導要領で解説や評価規準例、他教科や小学校を含む前後の学習内容を確認できる。資料編(3)P12(外⑫)

9 生成AI・ICTとの付き合い方

13項目

1. AI活用を学習指導要領に明記
オンラインでの人との交流などを含むデジタル学習基盤の活用を外国語の学習指導要領等に明記し、その一つとして発達の段階に応じたAIの適切な活用も書く。指導の参考となる考え方や実践事例も具体的に示す。P278 P282 P88

2. 原則：目標は人間同士のコミュニケーション
最終目標は外国語による人間同士のコミュニケーションを図る資質・能力で、AIを使った会話練習などはそのための手段。児童生徒の学びを深め、人間同士のコミュニケーションの充実につなげるという原則をはっきりさせる。P282

3. AIの出力を鵜呑みにさせない
自分の興味・関心に応じた例文をAIで作るなどは有効と考えられる。ただし、児童生徒がAIの生成物を鵜呑みにせず、出力を吟味しながら自分の学習に生かせるよう教師が支援することが重要。P282

4. 家庭学習の出し方に注意
単純な英作文など、単にAI翻訳を提出すれば済むような家庭学習の課題を出さないなどの注意が必要とされた。P282

5. 国が留意点・動画・資料を示し更新する
諸外国の例も参考に、授業内外でのAIの効果的な使い方について、適切でない使い方を含む留意点や動画・資料を国が具体的に示し、技術の発展に合わせて更新する。P282

6. 話す量を増やす道具として
AIの活用で、恥ずかしがらずに話すことなどの練習量を大幅に増やす。家庭学習と連携して発話時間を確保する。資料編(3)P15(外⑮)

7. 言いたいことを英語にする活動
AIで自分が言いたいこと(母語)を英語にする活動を強化することが、英語で伝えたい内容を整理・発信する活動の充実策の一つとして挙げられている。資料編(3)P15(外⑮)

8. 交流の機会をつくる
児童生徒が英語で伝えたいことのイメージを持てるよう、AIや学校内外での交流機会を使いながら、自分が伝えたいことを伝える活動を強める。P281

9. 母語使用の考え方にAIも含めて示す
教師の補助的な日本語使用や、発達の段階に応じたAIの活用も含めた児童生徒の母語使用について、参考となる考え方を解説で示す。P284

10. 発信科目のフィードバックにAI
英コミュ(発信)(仮称)では、個別のフィードバックが物理的に難しいという課題に対し、AIを含むデジタル学習基盤の活用も含めたフィードバックの工夫を解説等で示す。
資料編(3)P23(外㉓)

11. AIを使ったパフォーマンステストの検討
AIを活用したパフォーマンステストツールの可能性を検討すべきとされた。P285

12. AI時代でも相応の英語力は必要
AIで手軽に翻訳・通訳できる中でも、出力の正確さ・適切さを批判的に検討したり、ツールも使いながらリアルなコミュニケーションをしたりするには相応の英語力が必要という視点、AIを効果的に使う力が必要という視点が示されている。資料編(3)P14(外⑭)

13. AI時代の教師の役割
授業デザイン、児童生徒の学ぶ意欲の向上、自律的な学習者を育てる学び方の指導などがより重要になる。人間同士のリアルなコミュニケーションが大切になることも踏まえる。P285

10 今からできる準備チェックリスト

17項目

- [ ] 今すぐ 自分の単元を、「コミュニケーション活動」(目的・場面・状況に応じて理解・表現・伝え合う)と「それを支える活動」(語彙や文法を理解し使う)に分けて見直し、両者を行き来する流れになっているか確かめる。P284 資料編(3)P31(外㉛) 資料編(3)P34(外㉞)

- [ ] 今すぐ 単元の初めに「コミュニケーションを行う目的・場面・状況」を具体的に設定して生徒と共有する（例：日本に来たことがない海外の生徒に、住んでいる町の食べ物を紹介する）。資料編(3)P12(外⑫) 資料編(3)P13(外⑬) 資料編(3)P31(外㉛)
- [ ] 今すぐ 同じ表現でも場面によって意図が変わることを意識させる（例：Can you ～？ が質問にも依頼にも誘いにもなる）。似た意味の既習表現を整理して使えるようにする。資料編(3)P37(外㊲)
- [ ] 今すぐ 導入したばかりの語彙や文法をすぐ話せる・書けることを求めず、聞く・読むで理解する段階から話す・書く段階へ進める計画にする。資料編(3)P34(外㉞) 資料編(3)P35(外㉟) 資料編(3)P36(外㊱)
- [ ] 今すぐ 自分のこと・地域のこと・日本のこと・自分の意見を伝える活動を単元に入れる（例：地域のおすすめの場所を留学生に紹介、校則について意見を発表）。P281 資料編(3)P25(外㉕)
- [ ] 今すぐ 家庭学習の課題を見直し、単純な英作文などAI翻訳を出せば済むような課題になっていないか確かめる。P282
- [ ] 今すぐ 授業でAIを使う場合は、例文の生成などに使っても出力を鵜呑みにさせず吟味させ、最後は人間同士のやり取りにつなげる設計にする。使う前に、学校・教育委員会が認めた環境かどうか、利用規約・年齢制限・必要な保護者の同意を確かめ、氏名や写真などの個人情報は入力させない。P282
- [ ] 今すぐ 英語の学び方（学習方略）を授業で指導し、生徒が家庭学習でも自分で学習を調整できるようにする。高3の6割が学習方法が分からないという調査結果がある。P281 資料編(3)P15(外⑮)
- [ ] 今すぐ 外国語科で日本語と英語の語順の違いに気付かせる場面をつくり、中学校の文法指導につなげる。文を書き写すときは語と語の区切りに注意させる。P281 資料編(3)P19(外⑲) 資料編(3)P43(外㊸)
- [ ] 今すぐ 「書くこと」は、文字を丁寧に書く→語句を書き写す→語句を選んで書き写す→例を参考に書く、と段階を踏んで指導する。一文の書き写しで学校間に大きな差があるという課題がある。P277 資料編(3)P17(外⑰) 資料編(3)P21(外㉑)
- [ ] 今すぐ 外国語活動でも文字に慣れ親しむ活動を取り入れ、国語のローマ字学習などと関連付けて、5年からの読む・書くへ円滑につなぐ。P281 資料編(3)P17(外⑰)
- [ ] 全面実施まで 評価は5つの領域を「内容のまとまり」とし、単元の目標をそのまま評価規準にする形に移る方向なので、国の評価規準例が出たら単元計画の作り方を合わせる。P285 資料編(3)P38(外㊳) 資料編(3)P39(外㊴)
- [ ] 今すぐ パフォーマンステストで知・技と思・判・表を同じ課題で見取る形を試す（引き続き可能とされている）。資料編(3)P13(外⑬) 資料編(3)P40(外㊵)
- [ ] 今すぐ ALTやオンラインでの海外校との交流など、人間同士のリアルなコミュニケーションの機会を単元に組み込む。P285 資料編(3)P13(外⑬) 資料編(3)P15(外⑮)
- [ ] 今すぐ 帰国生徒や外国につながる児童生徒の外国語の力を、授業で生かせるよう配慮する。P282
- [ ] 全面実施まで 国が行う大規模オンライン研修や、動画・資料、表現集が出たら活用する。P284 P285
- [ ] 全面実施まで 学年ごとの目標は一律の作成義務をなくす方向なので、告示の内容を確かめたうえで、校種間の接続など必要がある場合に任意で作るかどうかを校内で決める。P280 資料編(3)P19(外⑲)

11 次期を先取りする授業アイデア

10本

小5・6　15分

日本語と英語、どこが入れかわる？語順パズル

カードを並べかえるだけで、英語の語順のきまりに子供が自分で気付きます。

手順・ワークシート

ねらい

聞いて言えるようになった英文について、日本語と語の並び方が違うことに気付き、語と語の区切りに気を付けて自分の文を書き写すことができる。

流れ

- 3分　先生が自分の好きなことを3文ほど話し、子供は聞いてまねして言います。単元の中で十分に聞いたり言ったりしてきた文を使います。
- 4分　日本語カード「わたしは／サッカーが／好きです」を黒板に貼り、その下に英語カードをばらばらに貼ります。ペアで、さっき言った英語の順に並べかえます。並べる前に必ず声に出して言ってから動かすようにします。
- 3分　日本語と英語の同じ意味のカードを線で結び、「どこが入れかわった？」と問いかけます。「『好き』が前に来ている」「英語は『だれが・どうする』が先」などの気付きを、子供の言葉のまま板書します。
- 3分　自分の好きなこと（I like ～. / I play ～.）を言ってから、ワークシートの4線に書き写します。単語と単語の間に「指1本分」をあけることを、先生が書いて見せて確かめます。
- 2分　書いた文をとなりの人に読んで伝え、相手の文を見て語の区切りを確かめ合います。最後に「今日気付いたこと」を一言ずつ書きます。

評価

【知識・技能】日本語と英語の語順の違いに気付き、語と語の区切りに注意して書き写している姿を、ワークシートの記述と書いた文で見取ります。【主体的に学習に取り組む態度】気付きを自分の言葉で表そうとしている姿を、単元を通して見取ります（この時間だけで評定に用いません）。

小5（外国語活動から外国語科へのつなぎ）　10分

最初の音はどの文字？サウンド・ハンター

単語の最初の音を聞き取り、文字と結び付ける10分間の帯活動です。

手順・ワークシート

ねらい

慣れ親しんだ語の最初の音を聞いて、その音に当たる文字を選ぶことができる。

流れ

- 2分　先生が絵カードを見せて語を言い、子供は繰り返します。絵と音が結び付いているかを確かめます。
- 3分　先生が語の最初の音だけを強調して言い（/b/, /b/, bag）、子供は手元の文字カードからその文字を選んで高く挙げます。答えは先生が文字カードを見せて確かめます。
- 3分　ローマ字表と比べ、「ローマ字の『か』は ka。英語の cat も同じような最初の音を c で表している（kite のように k で表す語もある）」など、似ている点と違う点を探します。ローマ字と英語では文字の使い方が同じではないことも確かめ、子供の発見を短く共有します。
- 2分　慣れてきたら、先生の代わりに子供が絵カードを1枚引いて語を言い、ほかの子供が文字を選びます。最後に、今日いちばん分かりやすかった音を一つみんなで言って終わります。

評価

【知識・技能】最初の音を聞いて文字を選べているかを、カードを挙げる様子で全体的に確かめます。迷っている子供には口の形を見せて個別に支援します（記録に残す評価は、慣れ親しんだ単元の後半に行います）。

小6　1単位時間（45分）

ようこそ、わたしの町へ！おすすめスポット紹介

自分の町のおすすめを、ALTや海外の友達に伝えたくなる単元のゴール活動です。

手順・ワークシート

ねらい

相手に行ってみたいと思ってもらえるよう、地域のおすすめの場所とそこでできることを、既習の表現を選んで話して伝えることができる。

流れ

5分 先生が自分の好きな地域の場所を、写真を見せながら紹介します。子供は「場所」「できること」「先生の気持ち」を聞き取ります。

8分 単元のゴール（例：来月来る新しいALTや交流校の友達に、町のおすすめを伝える）を共有します。「相手が知らないことは何かな」と考えさせ、伝えたい場所と内容を、日本語も交えてメモします。

10分 コミュニケーション活動を支える活動として、We have ～. / You can ～. / It's ～. を使ってペアで言い合います。言いたいのに言えなかった語を出し合い、先生が全体で取り上げて言い方を確かめます（例：「お祭り」→ a summer festival）。

10分 相手を替えて3回紹介し合います。聞き手は Sounds fun! / I want to go there. などで反応し、質問を一つします。回を重ねるごとに、伝える順番や付け足す内容を工夫させます。

8分 紹介メモを見ながら、例を参考に紹介文を2～3文書きます。写真と合わせて、ALTに渡すミニポスターにします。

4分 「相手に伝わったと感じた瞬間」と「次に言えるようになりたいこと」を振り返りに書きます。

評価

【思考・判断・表現】相手に行ってみたいと思ってもらえるよう、伝える内容や順番を選んで話している姿を、3回目のやり取りの様子で見取ります。【知識・技能】We have ～. / You can ～. を使って、場所とそこでできることを伝えているかを見取ります。【主体的に学習に取り組む態度】相手の反応を見て付け足したり言い直したりしようとする姿を、単元を通して見取ります。

小3・4　15分

ことばだけじゃない！ジェスチャー探偵

表情や身振りで「伝わる」体験から、相手を意識したやり取りへつなげます。

手順・ワークシート

ねらい

気持ちを表す簡単な表現を表情や身振りを交えて伝えたり、相手の表情や身振りから気持ちを受け止めたりしようとする。

流れ

3分 先生が声を出さずに表情と身振りだけで気持ちを表し、子供が当てます。当たったら英語で言い、子供が繰り返します。

4分 先生が無表情で平らな声の I'm happy. と、笑顔で弾んだ声の I'm happy! を言い比べます。「どっちが伝わる？」と問い、ことばと一緒に表情や声も大事なことに気付かせます。

5分 ペアで How are you? / I'm ～. のやり取りを、表情と身振りを付けて行います。聞き手は相手の顔を見て、Oh, you're hungry! などと反応します。相手を替えて繰り返します。

3分 手招きのイラストを見せ、国や地域によって「こっちへ来て」ではなく別の意味に見えることがあると紹介します。「わたしたちの身振りも、ほかの国の人には違う意味に見えるかもしれないね」と、自分たちにも返して考えさせます。

評価

【主体的に学習に取り組む態度】相手を見て、表情や身振りを交えて気持ちを伝えようとしている姿や、相手の気持ちを受け止めて反応しようとしている姿を、やり取りの様子で見取ります。外国語活動では、見取った姿を文章で記述します。

小5　1単位時間（45分）

新しいALTに届けよう！ウェルカムカード

「選んで書き写す」書くことの段階を、相手意識のあるカードづくりで踏みます。

手順・ワークシート

ねらい

自分のことを伝えるために、音声で十分に慣れ親しんだ語句を選び、語と語の区切りや符号に気を付けて書き写すことができる。

流れ

5分 先生が自分の書いたカードを読み上げ、子供は聞きながら目で文字を追います。読み終えたら、カードに書いてある内容を日本語で確かめます。

10分 語句リストの語を先生と一緒に何度か言い、言えるようになった語の中から自分のことを表す語を選びます。ペアで I like ～. / I can ～. を言い合い、選んだ語で伝わるか確かめます。

15分 例のカードを見ながら、選んだ語を入れて書き写します。書き始める前に、文の初めは大文字、最後にピリオド、語と語の間をあけることを、先生が実際に書いて見せます。

8分 ペアでカードを交換し、相手のカードを声に出して読みます。読みにくかったところがあれば、優しく伝え合って直します。

7分 仕上げたカードをALTに渡し、一人一文ずつ読んで伝えます。ALTからの返事やコメントを聞き、振り返りを書きます。

評価

【知識・技能】大文字・小文字の区別、語と語の区切り、ピリオドに気を付けて書き写しているかを、カードで見取ります。【思考・判断・表現】自分のことを伝えるために、語句リストから自分に合う語を選んで書いているかを見取ります。

小5・6　1単位時間（45分）

給食やそうじ当番は世界でも「ふつう」？

当たり前の学校生活を外の目で見直し、日本のことを英語で伝えます。

手順・ワークシート

ねらい

ALTの話や写真から自分たちの学校生活との違いや共通点を聞き取り、日本の学校生活について簡単な表現で伝えることができる。

流れ

8分 ALT（またはALTの話を録画したもの）が、自分が通っていた学校の一日を写真を見せながら紹介します。子供は聞いて、日本と「同じ」か「違う」かを札で示します。

7分 聞き取ったことを班で整理し、「日本では当たり前なのに、ALTの学校では違ったこと」を日本語で出し合います。先生は「どうして日本ではそうしているのかな」と問い、理由も考えさせます。

10分 コミュニケーション活動を支える活動として、In Japan, we ～. / We ～ every day. を使って、日本の学校生活を表す言い方を確かめます。clean our classroom, eat lunch in our classroom, wear indoor shoes などを、写真を見ながら言えるようにします。

12分 ペアや班で、ALTに伝えたい日本の学校生活を一つ選び、写真を見せながら伝えます。ALTは Really? Why? などと質問し、子供は分かる範囲で答えます。英語で言えない部分は、身振りや知っている語を交えて伝えてよいことにします。

8分 「ほかの国の学校と比べて初めて気付いた日本のこと」を振り返りに書き、何人かが発表します。

評価

【思考・判断・表現】ALTの話から日本との違いや共通点を聞き取り、伝えたいことを選んで話しているかを見取ります。【主体的に学習に取り組む態度】ALTの質問に、身振りや既習の語を使って粘り強く答えようとする姿を見取ります。

小6　15分（帯活動）

2回目はもっと伝わる！リトライ・トーク

話す→言えなかったことを全体で解決→もう一度話す。往還を15分で回します。

手順・ワークシート

ねらい

1回目のやり取りで言えなかったことに気付き、全体で確かめた表現を使って、2回目にはより詳しく伝え合うことができる。

流れ

2分 先生がALTや子供の一人と、今日の話題で短いやり取りをして見せます。

3分 ペアで1回目のやり取りを1分ずつ行います。言いたかったのに英語で言えなかったことは、日本語のまま付箋に書いておきます。

5分 付箋を集め、多くの子供が困っていたことを全体で取り上げます。「すでに知っている英語で言い換えるには？」と問い、子供から出た言い方を優先して板書します（例：「バーベキューをした」→ I ate meat with my family by the river.）。

3分 相手を替えて2回目のやり取りをします。板書した表現や言い換えを一つ使ってみることを目標にします。

2分 「1回目と2回目で何が変わったか」を一言で振り返り、ノートに書きます。

評価

【思考・判断・表現】2回目のやり取りで、共有した表現や言い換えを使って伝えようとしているかを観察で見取ります。【主体的に学習に取り組む態度】言えなかったことを書き留め、次に生かそうとしている姿を、付箋と振り返りで単元を通して見取ります。

小6　20分

AIの英文、ほんとかな？日本紹介を確かめよう

先生が用意したAIの英文を、みんなで「本当？」と確かめてから自分の言葉で伝えます。

手順・ワークシート

ねらい

日本について書かれた短い英文を読み、自分の知識や生活と比べて内容が正しいかを考え、より正確な文に直して伝えることができる。

流れ

3分 先生が「この英文は、生成AIに『日本を紹介する英文を作って』と頼んで出てきた英文をもとに、先生が練習用に作ったものです。正しくない文や言い過ぎの文も入れてあります」と正直に伝え、一文ずつ一緒に読みます。写真や絵を添えて意味を確かめます。

5分 一文ごとに、○（正しい）・×（違う）・？（わからない）のカードを挙げます。「毎日すしを食べる？」「日曜日も学校がある？」など、自分の生活と比べて、理由を日本語で話し合います。

5分 ×だと思った文を、知っている英語で直します（例：We eat sushi on special days. / Some people eat sushi every week.）。先生は子供の案を板書し、一緒に言えるようにします。

5分 自分が本当に伝えたい日本のことを一つ選び、We have ～ in Japan. / I like ～ in Japan. などでペアに伝えます。聞き手は That's nice! / Me, too. などで反応します。

2分 「AIが作った英文を読むときに気を付けたいこと」を全体でまとめ、振り返りに書きます。

評価

【思考・判断・表現】英文の内容を自分の知識や生活と比べて判断し、伝えたいことを選んで話しているかを見取ります。【主体的に学習に取り組む態度】「本当かな」と立ち止まって考えようとする姿を、話し合いや振り返りで見取ります。

小4（外国語活動）　1単位時間（45分）　生成AIの使い方つき

先生とAIでつくった「好きなものチャンツ」を、わたしの言葉に

先生が生成AIで下書きしたクラスのチャンツを声に出し、自分の好きなものに替えて伝え合います。

手順・ワークシート

ねらい

好きなものを尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しみ、友達の好きなものを聞いて、自分たちのチャンツをつくって伝え合うことができる。

流れ

5分 【AIを使わない】あいさつのあと、先生が絵カードを見せながら自分の好きなものを話し、何人かに尋ねます。

5分 【先生がAIで作った教材】「このチャンツは、みんなのアンケートで人気だったものを生成AIに伝えて作ってもらい、先生が言いやすく直したものです」と伝え、手拍子に合わせて聞かせます。

8分 【AIの出力を比べる】AIが最初に出した行（I absolutely adore crunchy, juicy apples!）と、先生が直した行（I like apples.）を両方言ってみて、「どっちが言いやすい？」「どっちが伝わりやすい？」を話し合います。「AIの案はそのまま使わず、言いやすく直して使った」ことを確かめ、直したチャンツをみんなで言います。

10分 【AIを使わない】ペアや近くの友達と What do you like? / I like ～. で好きなものを聞き合い、相手の好きなものを絵や記号でメモします。聞き手は Me, too! / Nice! などで反応します。

12分 【AIを使わない】4人グループで、聞き合った好きなものを入れて、チャンツの一部を自分たちの言葉に替えます（例：Ramen, ramen, hot and yummy. I like ramen.）。手拍子に合わせて練習し、クラスに発表します。

5分 振り返りカードに、友達の好きなもので新しく知ったことと、「AIが作ったものを使うときに気を付けること」を書きます（日本語でよい）。

評価

【主体的に学習に取り組む態度】（外国語活動では文章で記述）友達に好きなものを尋ね、相手の答えに反応しながら聞こうとしている姿を観察で見取ります。【思考・判断・表現】グループで、友達の好きなものを選んでチャンツの言葉を替え、伝えようとしているかを発表で見取ります。

小6　1単位時間（45分）　生成AIの使い方つき

言いたいことボックス：日本語で集めて、やさしい英語で伝えよう

「中学校でがんばりたいこと」を日本語で書き出し、先生とAIで英語の言い方を探して、自分が言える英語で伝えます。

手順・ワークシート

ねらい

中学校でがんばりたいことについて、知っている語句や表現を使って短く言い換え、相手に伝えたり、質問に答えたりすることができる。

流れ

5分 【AIを使わない】先生が中学生のころの思い出と、今がんばりたいことを英語で話します。

8分 【AIを使わない】「中学校でがんばりたいこと」を、日本語で、本当に言いたい形のまま言いたいことカードに書きます。班で見せ合い、英語で言えそうな部分に〇、言えない部分に線を引きます。

10分 【先生がAIを使う】線を引いた部分のあるカードのうち、本人が使ってよいと同意したもの、または先生が複数のカードをもとにつくった架空の例を3〜4枚（名前なしで）選びます。先生は手元の画面で生成AIに「小学6年生が言える、短くやさしい英語で3通り」と頼み、安全性・意味・英語の正確さを確かめてから、その3つを大型画面に映します。3つの英語を一緒に読み、「知っている言葉で言える」「長すぎる」を手を挙げて判定します。

3分 AIの案の中にも、長すぎたり、言いたいことと少しずれたりするものがあることを確かめ、「言い換えのコツ」をまとめます。

11分 【AIを使わない】自分のカードを、コツを使って英語1〜3文にし（1文でも達成）、ペアで言い合います。表現集（I want to ～. ／ I want to be ～. ／ I want to join ～. ／ I want to study ～.）と基本語彙リストから選んでよく、難しい内容は言いたいことを一つにしぼって言い換えます。言えないところは友達と相談し、先生は机間指導で個別の相談に乗ります。

6分 【AIを使わない】ALTや別の班の友達に伝えます。聞き手は Why? / What club? などと質問し、話し手は短く答えます。

2分 振り返りに「言い換えのコツで使えたもの」を書きます。

評価

【思考・判断・表現】伝えたい内容を、知っている語句や表現を使って短く言い換えて伝えているかを、ペアやALTとのやり取りで見取ります。【主体的に学習に取り組む態度】言えないところで止まらず、言い換えを工夫して伝えようとしている姿を見取ります。

12 指導案（試案）

2本

小学校第3学年　外国語活動　全4時間（本時は第3時）

アルファベットたんていになろう ～頭文字カードで自分を紹介しよう～

中教審の審議まとめ（2026年10月5日）で示された「外国語活動においても文字に慣れ親しむ活動を大切にする」という方向性を先取りした試案である。次期学習指導要領はまだ告示前であり、本案は審議まとめと資料編のイメージをふまえて作成した一つの例で、確定した内容ではない。音声で十分に慣れ親しんだ後に、身の…

指導案の全文

本時のねらい

自分の名前の頭文字を集めるために、文字の名称を聞いてどの文字かを判断し、'Do you have ˜?' を使って友達と尋ねたり答えたりしながら伝え合う。

本時の流れ

- **3分** 導入 挨拶をする。教師の後に続けて、AからZまでの文字の名称を、手拍子に合わせてゆっくり言う。
- **5分** 導入 第1時に見た身の回りのアルファベット（TV、AED、P など）の写真を見て、どの文字が使われているかを答える。本時のめあてを確かめる。
- **8分** 展開 【支える活動】ポインティングゲームをする。教師が言う文字の名称を聞いて、机の上の文字カードを指さす。次に、似た音の文字（B・D・E、M・N など）を聞き分ける。
- **7分** 展開 教師とALT（または担任と児童）のやり取りを見て、'Do you have ˜?' 'Yes, I do. Here you are.' 'No, I don't.' 'Thank you.' の意味を推測する。その後、教師が全体に 'Do you have the ˜ card?' と尋ねて児童がカードを持って答える練習と、隣の児童とのペアでの試しのやり取りをする。
- **12分** 展開 【コミュニケーション活動】「頭文字カード集め」をする。教師が事前に全員の頭文字を調べ、必要な枚数以上を用意して一人4枚ずつ配った文字カードを持ち、友達と 'Do you have the ˜ card?' で尋ね合いながら交換し（1枚もらったら、自分のカードを1枚渡す）、自分の名字と名前の頭文字の2枚をそろえる。そろったら、まだそろっていない友達を手伝う。途中で一度活動を止めて、困ったことを出し合う。
- **10分** まとめ そろえたカードを見せながら、近くの友達と 'My letters are H and S.' と伝え合う。振り返りカードに、聞き分けられた文字と、やり取りでうまくいったことを書く。何人かが発表し、聞き分けにくかった文字（板書の端に残したもの）をもう一度全員で聞く。

PDF版：shidoan-sho34-alphabet-detective.pdf（ダウンロードコーナー）

小学校第6学年　外国語　全8時間（本時は第6時）

ようこそ、わたしたちの町へ ～海外の友達におすすめの場所を伝えよう～

中教審の審議まとめ（2026年10月5日）で示された「自分の住んでいる地域に関する話題や活動を明確に位置付ける」「小学校外国語科では日本語と英語の語順の違い等への気付きを促す」という方向性を先取りした試案である。次期学習指導要領はまだ告示前であり、本案は審議まとめと資料編のイメージに基づく一つの案に…

指導案の全文

本時のねらい

海外の交流校の児童に町のよさが伝わるように、おすすめの場所とそこでできることを選び、語順や語と語の区切りに気を付けて、例を参考に紹介カードに書くことができる。

本時の流れ

- 5分 導入 挨拶をする。教師の Small Talk（自分のお気に入りの場所の紹介）を聞き、場所とできることを聞き取る。何人かの児童が自分のお気に入りの場所を答える。
- 3分 導入 本時のめあてを確かめる。前時に考えた「交流校の友達が楽しめそうなこと」のメモを見直す。
- 8分 展開 【支える活動】Small Talk の文 'You can see many birds.' と「たくさんの鳥を見ることができます」を比べ、語句カードを並べ替えて英語の順番を確かめる。'You can play soccer there.' などでも試し、気付いたことを発表する。
- 8分 展開 【コミュニケーション活動】ペアで自分のおすすめを伝え合う。聞き手は 'Sounds fun!' などと反応し、'What can I see there?' などで一つ質問する。相手の反応を見て、カードに書く内容（どの場所・どんなこと）を決める。
- 13分 展開 紹介カードを書く。①例文を指でなぞりながら教師と一緒に読む。②'We have __ in our town.' の下線部をワードリストから選んで書き写す。③'You can __ there.' も選んで書き写す。④最後の一文（'It's beautiful.' 'Please come!' など）は、例を参考に自分で選んで書く。書き終えたら、語と語の区切りを自分で確かめる。
- 8分 まとめ ペアでカードを交換し、声に出して読み合う。相手のカードを読んで「行ってみたい」と思ったところを伝える。振り返りシートに、語順について気付いたことと、相手に伝えるために工夫したことを書く。

PDF版：shidoan-sho56-welcome-to-our-town.pdf（ダウンロードコーナー）

13 現行の学習指導要領・解説（小学校）

PDF **小学校学習指導要領（平成29年告示）（本文）**
https://www.mext.go.jp/content/20230120-mxt_kyoiku02-100002604_01.pdf

PDF **小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語活動・外国語編**
https://www.mext.go.jp/content/20220614-mxt_kyoiku02-100002607_11.pdf

文部科学省の公式PDFです（クリックで開けます）。

ご利用について

- **研修・会議・授業・保護者会での印刷・コピー・配布・投影はご自由にどうぞ。ご連絡は不要です。**
  （校内研修・教育委員会の研修・教員養成の授業・学年会・PTAなど）
- クレジット「原田英語.com 次期学習指導要領ナビ」
  （https://www.haradaeigo.com/jikigakushushido/）はそのまま残してください。
  各ページの下に入っています。
- 中身は中央教育審議会 教育課程部会「次期学習指導要領等に向けた審議まとめ」（2026年10月5日）ほか文部科学省の資料をもとに、原田英語.comが要約したものです。**告示前の方向性**で、答申・告示で変わることがあります。（仮称）の名前も今後変わる可能性があります。
- 文中の P○ は審議まとめ本体（PDF）のページ、**資料編（1）～（3）P○** は第3部 資料編（PDF）のページです（PDFのページ番号。印刷されたページ番号とは1つずれることがあります）。PDFで見ているときはクリックで原文が開きます。
- 授業アイデア・指導案は、審議まとめの方向性をふまえた原田英語.comのオリジナルの試案です。
- 最新の情報・ほかのPDFはサイトで：
  https://www.haradaeigo.com/jikigakushushido/download/（2026年11月4日 版）

サイトで最新版を見る